

2000年・ベイルート・春

足利市
足利市

Journal of Clinical Anesthesia 2000; 12: 101-106

プロlogue

〔1〕――2月下旬、日本警察署が、刑期終了にともなう日本赤軍5名の身柄引き取り――日本送還の実行のため、準備、実行体制を取つてゐる、と発表。(日本新聞記事の内容を、差入れに来てくれた救援関係者から伝えさいた。)その内容の主な点は、1)警備を含む護送部隊を、東京の警察機動隊員など200名で編成し、2)レバノンの隣接国の大港に、JALなどのチャーター機を待機させておき、3)そこで身柄引き渡しを受けれる、というもの。

日本政府による、レバノン政府に対する執拗な身柄引き渡し要求のための示威キャンペーンの一つ、と判断した。日本政府ならやりかねない仕方だが、レバノン政府には、とても賛成しかねるものどうとした。但し、隣接した空港としては、国際情勢から考えると、アテネ（ギリシア）、ニコシア（キプロス）、そしてアンマン（ヨルダン）になるだろう、とした。しかし、「ベイルート⁵」の基本的な考えは、レバノン政府が協力する可能性は五分五分、というもので、差し迫つたものとは考えていなかつた。

「日本政府への身柄の引き渡しを拒否」を確定した、と記者会見で発表。その内容は、日本政府が示した、日本赤軍ら名の身柄引き渡し理由を司法省で検討し、閣議で討議、結論したもので「要求の根拠として理由としては不十分」と情報相が説明発表した。同時に、「亡命承認問題は、亡命問題特別評議会が、現在検討中で未定」と付け加えた。

この、レバノン政府の決定は、レバノン南部で、占領者イスラエルとのレジスタンス戦争を闘う全国民のコンセンサスを踏まえた意志表示として、最大限に評

価すべきものだ。——ペイルート5が拘置されている刑務所内では、この決定を支持する大多数の囚人たちが、祝賀

「トト5」も、すぐ、現地の支援運動「岡本公三」と彼の同志たちの友人の会」と曰く、本の「帰國者の裁判を考える会」「ウナディゴム（レバノン・日本＝民衆連帯）」へ喜びと感謝のメッセージを送った。

し、質問には回答しなかつたし、撮影したフィルムは違法行為のため他の看守たちに捕獲され、処分されたという。但し、両刑務所は、「ベイルート5」に代つて、大使館側の質問には、全て回答

これで、日本への強制送還の可能性が公式レベルでは無くなり、第三国への渡航（レバノン領からの追放）ないしは、亡命の承認の可能性が生まれた、と判断していた。

〔4〕――3月6～14日、「ペイルート」は、レバノン政府に申請していた亡命の承認へのOK回答を早く出すようになって望する、獄中ハンガーストライキを申し合させて、6日に開始した。刑務所規

〔3〕――3月31・5日・在ペイルート日本大使館の館員が、「ベイルート5」への面会を申請し、刑務所に来ました。

律の違反行為であり、すぐ處罰室に放り込まれた。

ルミエ中央刑務所の4人は、保安係長・既決囚区区長を通じて拒否の回答をし、彼らの面会目的と理由を、後で聞いて貰うように頼んだ。後日の保安係長の話では、大使館が質問したがつた内容は、1)各人の健康状態、2)衣食は十分かどうか、3)領置金はあるか、幾らか?とい

中止した。
獄外では、「友人の会」のメンバーたちが呼応して、シット・インとハンストと共に開始した。

書を語りはじめ、「知っているか?」と早速論議をふつかけて来たりした。私は、「情報提供との交換条件なら、西独への亡命には、興味がない」と拒否回答した。西独側はねばねうとしたが、とり合わなかった。

検事総長、ラビアーア判事と、「拒否回答」の確認をし、仲介努力を感謝して辞した。

【6】——3月15日・シリアのトラース国防相が、イスラエルの会議成立のための前提無視で中断されていた「シリアーイスラエルの和平交渉再開は間近い」と発表。突然の発表に、交渉にむけた水面下の動きが激しいことが、窺われた。

「政府と対立感情を生まないためには、これ以上は無理」と総括し、ハンストを中止（ドクターストップ）した。戸平、和光が処罰房からもどにもどり、体力回復を目指し始めた。

【7】——3月16日・シリアー米国の首脳会談が開催合意された、とシリア側が発表。

これは、インド訪問中のクリントンが帰路ジユネーブに立ち寄り、アサド大統

領とそこで、和平交渉再開のための条件固めを行う、という。クリントンは、イスラエル政府の立場をしばしば代行して来たし、この会談が成功すれば、中東和平交渉は、シリアーイスラエルだけでなく、レバノンーイスラエル交渉も進行することになり、アラブ全体に、大変化をもたらすことになる。

「ベイルート5」としては、シリアの主張する包括和平案の実現を断固支持し続ける立場にありながらも、同時に、シリア、レバノン内の親米勢力が、首脳会談の成功への条件づくりに「ベイルート5」の存在を追いつめる仕方もあることを、可能性として考えたりした。しかし、全体情勢としては、当分の間は、私たちの問題にそれほど影響しないだろうとも考えた。

2 「アドハ」の日に、襲撃!! 誘拐団の第一班

【1】——3月17日・回教徒にとって、メックカへの巡礼スケジュールが前日に終り、最も聖なる祝祭「アドハ」の日だつ

た。全ての公式事業は、アドハのお祈りを中心にするだけに制限され、首相はじめ主だった閣僚、省庁の高官は、回教寺院で宗教行事に参加していた。T.V.放送は、その様子を早朝から、えんえんと流し続けていた。公的な祝祭日スケジュールで、刑務所の面会も、禁止されていた。

のんびりとした休日なので、私たち4人も、近隣の房から、差入れのお裾分けとして届けられるお祝いまんじゅうを食べ、昼食は、恒例の「ツケうどん」をやろうと、ツユづくりと熱湯わかし（スペゲッティ）をゆでて「うどん」にする

をはじめた。

【2】——同、1時半・突然、私たちの扉が引き開けられ、数人の看守と一緒に既決囚区の区長と保安係長が入つて来て、保安係長が「今から他へ移動する。数日のことなので、最低限の必要物品を荷造りして扉外へ出す。荷物量は、自分で持てる小バッグ1個分。用意時間は10分!」とオーダーした。区長と保安係長が直々現われた点、一人の表情がいつもと違つて極度に緊張しているので、もつ

と様子を知るために、「どこへ行くのか?」「何日くらいか?」と訊くが答えない。

そのかわりに「岡本公三の荷物はどうだ?」と訊き返し、荷造りを急きた

た。

自然なものを感じたが、オーダーに従つた。

4人が全員ショルダーバッグをかつぐと、既決囚棟出口へ急がせた。ビルの外で待つ保安係が横の領置品置き場に案内、

区長の立ち合いで一人ずつ貴重品と領置残金を封筒で手渡され、順番に護送トラック（鉄箱に窓がついているだけのもの）に乗せられた。既決囚の多数の房から私たちが乗り込む姿をみた囚人たちが、「どこに行くんだ?」「がんばれ!」「気をつけろ!」と声援を送ってきた。4人が乗り込み終ると、外から鉄箱が施錠され、正門から護送車は、刑務所の外へゆるゆると走り出た。——ここまで病院行きや裁判などで司法省へ行く仕方と変わらず、いつも通りである。従つて、4人は、「移民局への移管か?」しかし、何故こんな祭日にやるんだ、誰も働いていないだろう。「とにかく、これから、私たちは、1・4に、公三と分離される可能性がある。公三を守つて身をはなさないようにしてよ。」と話し合つていた。

ゆるゆる走つていた護送車が止つた。いくらも走つていないので、まだ刑務所横の埠にかこまれた坂道である。

小窓から外をスカシ見ると、装甲車が、そして完全防備のレンジャー部隊と特別車輛が見えた。

特別保安隊だ。移民局行きじゃないぞ



ツ。やつぱり、やられる可能性が大だ
ツ！」「じゃ、閉じ籠もり戦術しかない
ぞ！」と言い合っている間に、鉄箱の錠
が開けられた。ドアの外には、一たん姿
を消していた区長と保安係長が立ち、そ

の横には、刑務所長まで登場していた。

そして、何やら、特別部隊と激しく口論
談判しているようだ。やがて、所長が鉄
箱内に入つて来て、「全ではOKか？」
と訊くので、「私たちは、どこへ送られ
るのか？」「特別部隊はどこの者か？」
と問い合わせた。「まあ、待て」と所長は、
私たちが外へ出ようとするのを制し、新
しい部隊に私たちを中心押しもどさせた。
その部隊は、「開始せよ！」というオー
ダーの声で、「あらためて、一人一人の
身体検査をする」と宣言して、シャツ、
ズボン、靴までぬがせてチェックし、バ
ック四つの中も一つ一つていねいにチエ
ックした。鉄箱の中は、私たち4人と、
一人につき3人はチェックする部隊員が
入り込み、満員の状態になった。

「よし、終つた者から乗り換えさせろ！」
のオーダーで、和光、戸平、岡本、私の
順で鉄箱から出された。その途端、「よ

し、かかれ！」と一人一人がはがい締
めにされ、後ろ手錠をかけられた。

特別護送車が横づけにされており、戸
平、和光が多少の抵抗をしたが、それに
積み込まれた。岡本が2台目の特別車に
乗せられようとした。私が「岡本を一人
にするな！」一緒に2台目にする」と隊
員をふりほどいて、「岡本、行くな！」
と叫んだ。特別部隊の指揮官らしい平服
の男が、「この車は一杯だ。彼は荷物と
一緒に2台目にする」といい、「では
オレも岡本と2台目に乗る」と私が押
し問答していると、岡本が「薬だッ、薬
をくれ！ アナテンソール！」と叫びだ
した。「見てみろ！ お前のせいだ。お
前は何も分つてないッ！」岡本をいじめ
るな！」と私は岡本と一緒に2台目に乗
ろうとした。一瞬、反撃されて呆然とし
た隊長は、「俺が全て知つていてる！ こ
いつを1台目に乗せろ！」と叫び、隊員
たちが寄つてたかり、かねて指揮されて
いたのか、岡本を除く3人に、後ろ手錠、
足かせ、目かくしを手早くはめ、特別車
の暗箱風のドアをガチャリと閉めさせた。
この間、約15分。私、和光、戸平は、そ

にするな！」と一緒に2台目に乗る」と隊
員をふりほどいて、「岡本、行くな！」
と叫んだ。特別部隊の指揮官らしい平服
の男が、「この車は一杯だ。彼は荷物と
一緒に2台目にする」といって、「では
オレも岡本と2台目に乗る」と私が押
し問答していると、岡本が「薬だッ、薬
をくれ！ アナテンソール！」と叫びだ
した。「見てみろ！ お前のせいだ。お
前は何も分つてないッ！」岡本をいじめ
るな！」と私は岡本と一緒に2台目に乗
ろうとした。一瞬、反撃されて呆然とし
た隊長は、「俺が全て知つていてる！ こ
いつを1台目に乗せろ！」と叫び、隊員
たちが寄つてたかり、かねて指揮されて
いたのか、岡本を除く3人に、後ろ手錠、
足かせ、目かくしを手早くはめ、特別車
の暗箱風のドアをガチャリと閉めさせた。
この間、約15分。私、和光、戸平は、そ

れまでの前手錠を後ろ手錠の数珠つなぎ
にされたまま身動きできなくなつた。特
別車がやがてスタートし、岡本とは、以
降会えなくなる。……2時半頃だったと
思う。

【3】——伴走する装甲車両の音、車の走
り方を耳で探りながら、3人は、落ち着
いて来て、怒りの叫び声から、情況把握
を一致するための会話を活発化させた。
「隊員たちの一部が、『飛行機』1台は
別」と言つていた。我々は空港で、公
三は別だろう。「この扱いは、強制送還
を決めたやり方だ。メチャクチャしても
いい、という方針だろう。手錠が食い込
んで痛い……」「まあ、もう暴れても仕
事ないかも知れない。残念だが、レバノ
ンの決定だ」「車のスピードが遅すぎる。
登り坂なら、女子刑務所経由、飛行場
か？ ……他は考えられない。」

やがて、ジェットエンジンをぶかして
いる音が近づいて消えた。もう間違いな
く、ベイルート国際空港に近づいたこと
が感知できた。厳嵩な『送還』が実行さ
れている事実がひしひしと感じられた。
「もうこうなつたら、覚悟を固めて、最

立は病人だ。何のための拷問だ！ 止め
ろ！」と叫んだ。隊長は「お前もやられ
たいらしいな！」とうそぶいて、取り合
わない。そして、兵隊たちと強がるために
か、大声で笑つたり、談笑したりし始めた。
話の内容は、昨日、誰と会つたとか
飲んだとか、全くガキ話のようだ。

とにかく、私たちは、岡本を合流させ
られた、とそれで分つたので小声で情報
交流を始めた。
「岡本は、別扱いで分離された。彼だけ
でも、亡命許可が出来ることを期待しよう。
目かくしされていないのなら、出来るだ
け周りの人の動きをみて、教えてくれ。」
と私はたのんだが、「私も目かくしされ
ている。前手錠が救いだけ……」との
状態だった。しかし和光が「汗で目かく
しが少しずれている。一角から周囲が少
しみえる。全て報告する！」と、小声で
伝えた。私たちの声がモレ聞こえたのか、
「黙れ！ 会話を禁止だ！ 続けるなら、
テープを口に貼るぞ！」と叫んで、おど
かして来た。私たちは、「うるさく騒い
でいるのは、お前たちだ！ 静かにし
ろ！」ときりかえすと、直反応して突き

い扱いは無かつた！」と主張せざるを得
ないものだつた。

私たちは、「責任者は誰だ！」と見え
ないので声だけで質問し、「何の用だ！」
と近づいて来た英語の出来る相手に、手
錠の輪を少しゆるめることと、3人數珠
つなぎで床にも座れない姿勢を床に座れ
るように要求した。「必要ない！」と取
り合はないので、私たちは繰り返し要求
した。相手は、「よし、ちゃんと調べて
おけ！」と最後は妥協した素振りで、
「俺は出かけて来る」と足音高く去つた。

兵隊たちがやつて来て、私たちを無理な
姿勢で床に押えつけた。その分、更に手
錠が手首に食い込んだ。

「無理だ！ 手錠をゆるめる！」と叫ぶ
と、手錠を調べるフリをして更にきつく
締めた。一つまり、隊長は言葉での回
答とは逆に、合図で、更に締め上げろ、
と命じたのだ。

私たちは騒ぎ続けた。30分もしただろ
うか、数人が再び手錠に手をかけて、ほ
んの少しゆるめ、隊長「これで十分だ！」
と私たちを床上に押さえつけた。突然連
れて来られたばかりらしい岡本が、「足
も強制送還は、これで間違いない。しか
し、以前にも送還されたが、こんなひど

ころがされた。

「そうこうしている間に、ガキ話がピタリと止んだ。和光が小声で、見えるものの説明を開始した……」「6人くらい入って来た。将校も居るようだ、金貴が敬礼している。空港係官らしいのも、また入って来た。……こちらを見て打合せている。書類を見て、オーダーしている。レバノン側の渡航証をつくるんじゃないのか……」「つまり、この部隊は、移民局の者だ。」「他に居ないか？」日本大使館員はないのか？」

「大勢いるから、陰になつていてるかも……また大勢入つて来た。平服が多い。しかし、あの小男は日本人かも知れないが……分らない。」

和光の実況中継で、見物に来たと思われる者、空港関係者、書類手続きの進行、その他を把握できた。また、私たちを捕縛警備している者も平服の4人だけで、残りの兵隊は、特別車（暗箱）とともにビル外に待機していることなど……が分った。

後ろ手錠の苦しさが激しいので、上官らしい制服が来た時にもう一度騒ぐ

ことにした。制服は「何だ？」トイレか？」と訊いて来たので、「ちがう。この子供たちがうるさ過ぎる。静かにさせろ。そして、この手錠を少しゆるめろ、決して暴れない。手が傷つき始めている。……こんな状態でお世話になつたレバノンにさよならをしたくはない。こんな下品な子供たちが、最後に会うレバノン人だとしたら、悲しすぎるじゃないか。」

上官らしい制服は、警備側に、何か伝えたようで、ガキたちは静かになつた……が、逆に陰湿に、「クチヤクチャ」とガムを噛む音を一人がかりで耳に吹き込んだり、靴をばたつかせて、鼻先にホコリを舞い上がるらせ咳き込ませたり、嫌がらせを続けた。これらを受け流しながら、私たちを『強制送還』以上の仕方で、日本政府へ身柄を渡すことで、何らかの野心を満足させようとしている部隊の兵隊のすることだ。これは、上から下まで買収された結果を、示しているだけだ。もう、取り合わないことにしよう。」と私たちは決めた。

そして、彼らの一人が、和光の目からしがズれているのを見つけ、もとにもどりだした。

した。

その「VIP裏部屋」には、約2時間半、閉じ込められていた。一度だけ、順番にトイレに連れて行かれ、便器の前で小便をする間だけ、片手錠にし、目からみをはずされた。連行していた一人の私服員は、相かわらず、カウボーキッドをきどり、ガムを大口で噛み、ニヤニヤと照れ笑いを続けていた。私は、彼らの人相を決して忘れることが出来ないだろ。

3 ベイルート出発

【1】——6時頃。どどーっという感じで、大勢の部隊が入つて来たらしいことが分った。VIP部屋のドアというドアが開けはなれたのか、ジェット機のエンジン音が急に部屋中を満たした。部隊の掛け声も、ほとんど聞きとれない。

突然、両側から抱え上げられ、和光、戸平、私ははじめてバラバラに、だが後ろ手錠にされ連れ出された。途中、何度も抱え上げられるながら進んでいくのは、エンジン音に向つてである。号令と「ナ

りだした。

機が上昇していくのを感じながら、気分は落ち着き始めた。感情が、怒りを通り越して、空虚感に満たされ始めたのである。レバノンに生きてきた30年の想いが、1枚1枚の画像シーンのように次々と浮び出て来はじめた。私は感傷的になつてゐる場合ではない、と自分に言いきかせ、どうも公三は居ないようだが、どうしたろうか？ と心配してもどうしようもないのだが、そちらに想像力をむけ、そう言えば、刑務所を出る時から、一滴の水も飲んでいないことに気づき、男に「水をくれ」と言つた。もちろん、答えば「ノー」だった。

【2】——やがて、機内アナウンスが「6時半発MEA、○○○便、アンマン行、間もなくスタートします……」と告げた。静まつてゐた機内の人々が、がさごそとフライトする準備を始めた。「そうか……やっぱりアンマンか……アンマンには、もう日本政府側が待つてゐるんだろ？」と押さえつけてゐる男にわざと大声で訊いた。男は「私は何も知らない」という。「いや、そのためにお前たちはこのアドハの祭日をねりつて、誘拐してゐる。日本政府に私たちを渡すんだろ！」と更に言うと、男は「ノーッ！ ノーノーネット！」これ以上声を出すなら、テープだッ！」と慌てて両掌で、私の口をふさいでしまつた。私も、再び静かにすることにした。飛行機が動きだしたからだ。やがて、エンジンが最大にぶかされ、身震いしながらエネルギーをためて、走

ム」（＝「はい」という回答）が繰り返されながら、宙ヅリ風にタラップを抱え昇られたかと思うと、もう機内に入つた。赤ん坊や子供の声、母親らしい声と、一息に、人々の中に連れ込まれた。そして、頭を押さえつけられ、座席に押さえつけられた。

「後ろ手錠のまま座れるわけがない！」と抗議すると、「じゃあ、これでどうだ！」と頭を前座席に押しつけ、後ろ手錠をぐいっと力一杯引きねじり、斜め角度で押さえつける。「やめろ！ 痛い！」と暴れると、「テープで口をふさげ！」と前の座席が叫ぶ。周りの人々の話し声が静まりかえつた。

「いいか、今度騒いだら、口にテープを貼るぞ！」と、ガキ平服が、私にというより、周りの人々を意識して強がつて言つた。

「二人を数珠つなぎにしたまま座れる訳ない！ 一人一人にしろ！」と、戸平の声が叫び、和光もアラビア語で抗議している。私も「おーい、大丈夫かッ！ 無理させるなら、暴れても抗議しようッ！ いいかッ！」と叫ぶと、私を一人がかり

から私たちの身柄をもぎとるように引き取り、はつきりと、「囚人」としてではなく、「捕虜」としてでもなく、敵対的な「モノ」として取り扱っている。これ

は、移民局全体か一部か、自分で、我々に敵対する立場に立つたことを宣言している。丁度3年前に、国家保安局部隊が私たちを逮捕し、その不純な動機と、買収された保安長官の独走行動が軍法会議で「有罪」と裁かれ軍籍を剝奪された時と、同じケースなのではないか? 今度はゼネラル・セキュリティ(総合保安局)の誰が尻尾キリにされるんだ?……などと、どうでもいい事の方に想像力を働かせることにした。

ペイルートー・アンマン間は、飛行距離は、約1時間半。対イスラエルの戦争体制の、レバノン・シリア国境地帯を迂回して北上し、シリアに入つてから真つ直ぐにヨルダンまで南下するので、最短距離を飛ぶコースではなく、約2倍の時間がかかる。

4 アンマン着!! 「誘拐団」の 第二班・日本政府登場!

【1】— 再び、機内アナウンスで、アンマン着が告げられ、機は、イスラエル機が追跡していないのを確認するために飛行場上空でぐるぐる旋回した上で、下降し始めた。滑走を終つた機内では、早々と人々が立ち騒いで、出口に急いでいたが、……それらの騒音が止んでしばらくすると、またもや、ドヤドヤと大勢が近づいて来て、何やら確認を耳打ちしていたが、私は、ぐいっと、再び宙ヅリに運ばれはじめた。

「自分で歩くから、地に下ろせッ!」と言つと、しばらくは、そうするが、段差のあるらしき所や、ステップを降りるらしい所は、やはり宙ヅリをくり返す。そこで、しばらく待たれていたが、「よーし」と合図があつて、両脇が抱えられ、小走りで機内を出て、ステップもまた急いで運び降ろされ、立ちどまつた所で、いきなり目かくしが、むしり取られた。

5時間以上の暗闇から解放された、視

割れて、男たちが走るのと並行して走つて来る。その男たちも一様に、空港労働者が着る紺色の上つぱりをはおつていて、そして、皆、腰には銃をぶらさげているのもいた。全て、空港警備員だ。

私を抱えて走る集団が一直線に進む前方には、「アエロフロート」機が、搭乗口を開けて待つていた。私は、周りが全てアラブの人々だと思い、思いきり大声のアラビア語で叫びつけた。「私は日本赤軍だ!」こんなことをしてお前たちは恥かしくないのか?」「アイーブ」(アラビア語で「恥ずかしい事だぞッ!」)行列して走る警備員たちが、ニヤニヤうなずいてみせる。両脇を抱える男にも言うので、左右の男たちは、「そうだッそうだッ」とうなづいて見せながら、その分、気合いを込めて足を速め、一息に、「アエロフロート」のステップも昇り上り、扉口に待ち構えていた「アエロフロート」のロシア人スタッフ、通路わきにたむろして、こちらを身構えて窺つている日本人たちを尻目に、そのままドドーッと機内の後尾へ走りつけた。その後尾座席の列の中に、既に和光、戸平、

山本が両側を日本人に囲まれて座席に座つている姿が見えた。

私の後ろ手錠がはずされ、ペイルートーから来た、その二人の平服の男は、挨拶もせずに外へ小走りに逃げ出して行つた。ついて来ていたアンマン空港の作業衣の男に目かくしを投げつけて、「お前たちのモノだッ」と言うと、その男も「サンキュー」と走り去つた。これが、誘拐団の第一班、レバノン部隊の任務終了で、第二班の日本人部隊とロシア人スタッフへの引きつぎの合図だった。

だ!」と訊くが、手で私を制してはなれないが、小型マイクに何かしやべり続けて、元の位置にもどり、男たちにサインを出す。男たちが、ていねいに力づくで私を着席させた。

ジエットエンジンが強力なタービン音を上げ始めた。男たちが、多少身構えて、所定のポジションに立つという具合に並んだ。この男たちのうち、私たち4人の側で密着体制をとつて立つ班の12人くらいはボロシャツ、ジャンパーなどの平服で、山本についている婦警らしい一人と、他の20人くらいは、例の紺の制服―刑事への官給スーツだ。「やはり警視庁の刑事が中心の編成じゃないか」などと私は考え、両隣りの二人(左側が柔道でもやつていて感じの青年、右側は、剣道でもやるのか、ダテ眼鏡風の中年)にも、「あんたたち、どこの人、機動隊員でしょ?」と訊くが、手を振つて答えない。「私と話しかやいけないんだ。命令なんだね?」ときくと、大きくなずく。「じゃあ、仕様がない。あんたたちの親分にきくしかないね。」と、それまでに前が指揮をとつてゐるな、どここのモノ

界にとびこんで来た光景は、夕暮のアンマン空港のエプロンで、眼前には、一群の人々が、こちら向きに並んで立つてゐる。全員、緊張で引きつった顔つきだ。その人々の中心付近で、一きわガチガチに固い姿をした紺色制服に制帽の男が、突然、カン高い声の英語で、「お前は、レバノンに送り返せ!」この後の飛行機に連れもどせ!」と反論した。制服男は、「以上、本人に通告した、終り!」と取り合はない。こちらと眼を合わせないで、そっぽを向く。すると、そのすぐ右隣りにいた眼鏡とオールバックの日本人が「はい。ここに、日本政府が、あなた方の渡航証を今発行しました。通告します。終り」と、これはまた、蚊の鳴くような高音で小さく叫び、さーと人垣の後ろへ逃げて行つた。「なんだ、これらは!?」と思う間もなく、私は、機内から運び出されたと同じように、両脇から抱えられて、エプロンを小走りに運ばれ始めた。それにつれて、人込みの列が左右に

人スチュワーデスに、先ず、英語で「水をくれ」と要求した。スチュワーデスが「OK」と返事しながら、先の小猿男の方をながめる。小猿男がとんで来て、左側青年に「なんだ?」と顔をつき出して訊く。青年が「水がいるそうです」と耳元につぶやく。小猿男が「ダメッ、ダメダメダメッ!」とキヤキヤキヤと鳴くよう叫びながら、元の位置にもどる。それは、動物園の猿が、群の中で決められた岩場の一隅の自分の位置にまわりを警戒しつつもどる仕草とそっくりで、私は噴き出してしまった。中年の右側も苦笑していた。それを、きつかけにしたように、両側の男たちの緊張も、ほぐれたようだ。

【3】——『エロフロート』機は、すぐに飛び立つた。上昇し終つて平行に飛んでいても、「ベルト着用」のサインだけは消えない。日本人の群は、制服と平服を合わせて、40~50人が姿を見せ、前方、つまり機首の近くのシートには、警察庁や外務省の高官がいるのか、カーテンで隠している。スチュワーデスが飲みものを配つた。

いうことか。

三つは、在ベイルート日本大使館の館員の一人が、通路を通り抜けているのを見たので、声をかけたが、ふりきるようには逃げた。そこで、私は、右側中年男に、「あの、大使館スタッフと話をしたいの、呼んでくれ。」と要請した。長く待たされたが、やがて現われて、右隣りのシートに座り、「なんでしょう?」といふ。

私は、私たちを乗せている『エロフロート』機は、誰がチャーターし、誰の権利で私たちを誘拐しているのか?それは極めて重大な犯罪行為ではないのか?と訊くつもりだった。だから、彼と話してみようと思って来もらつたのだが、「なんでしよう?」と私に対して発言した彼は、すでに100%身構えてしまつていて。殴られるのじやないかとんだ?』と質問するのも間抜けだし、警戒もしている。

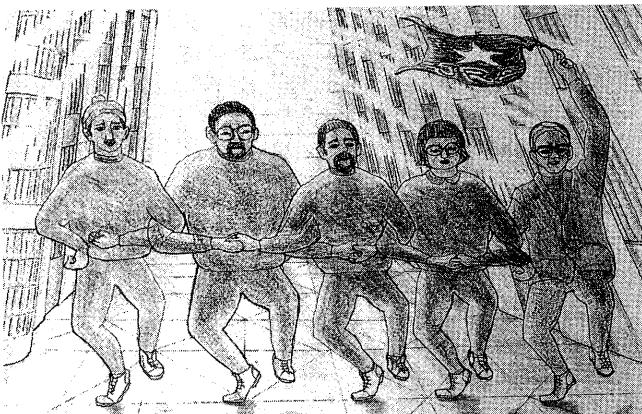
そんな彼を見た瞬間、私は考えを変えた。『誘拐団』の団員に向つて、「君は誘拐団の一員か?」「誰が親分をやつてるんだ?』と質問するのも間抜けだし、それに答える間抜けな団員もいる訳はない

刑務所を出て、もう7時間くらい経つて、初めての水を飲んだ。もう、ノドが渴いたというのを通り越して、以後の長期戦を考え、出された小サンドのパンの部分も食べた。

トイレに行くのも、小猿男が全陣型の配置をたしかめ、小マイクで答申して回答を得るらしく、なかなか行かせない。

の、2枚目は嫌疑の内容が詳しく書いてある。そして……私は、あと疑問に思い、「これは拒否しますよ」と言う。初老は、「拒否してもしなくとも、これは、あんたを逮捕していい、という書類です。はいっ！逮捕します。3月18日、7pm、アエロフロート××便 座席番号○○○。

ハイ、では撮つて！」と、後ろの紺色スレーブ青年に命じる。パシャッとフラッシュ。初老「では、こちらの荷物の押収に入ります。ハイ、撮つて！」初老が、荷物に手をかけて、また、パシャッ。そういう仕方で、要所要所の、現場シーンを撮影しながら、最後にナイロンテープを長々とつけた手錠を私にはめて、パシャッと、記念撮影風に全景を撮つて、初老「では、行きましょう……」と私を引きつれて、機首の乗降ドアまで行き、そこでナイロンテープを自分のベルトにしっかりと結びつけて、私と並んで立ち、「では連行します。ゆっくりと歩いて下さい。」とステップを踏み出した。あたりを見ると、ロシア人スタッフが遠くから隠れるようにこちらを窺つている姿がいくつもあり、尾翼の方には、



静かに、だが、直接的に、誠実に勝ち抜いていこう、と覚悟を固めることが出来た。

そこで、私が自己主張できる、最初の唯一の機会、4月3日午後の拘留理由開

示の法廷で、それを次のように、宣言した。

「私は今、この法廷に、否応なく立たさされている。そのことをめぐる私の意見を4点にわたって提案したい。

第一点は、私をこの場に立たせるために、犯罪行為を行つた国際的な誘拐団を糾弾し、裁き、処罰すべきだ、と主張したい。

この誘拐団は、日本の警察庁、外務省を主犯にした、三つの班から構成されている。第一班はレバノン移民局を名乗るレバノン特殊部隊だ。彼らは、2度にわたりレバノン政府への日本赤軍5名の身柄引渡し要求を拒否された日本政府（外務省、警察庁）が、合法的な手段では意図達成が不可能と察知し、遂に非合法一犯的な手段にうつたえて買収によって犯罪集団をつくり、レバノン刑務所側から私たちの身柄を掠奪誘拐して、ペイルートからアンマン空港へ拉致させたものだ。

そして、それらの指揮をとつたのは誰か？ 最初にいつたように日本の外務省と警察庁だ。私は、彼らの犯罪行為をばき、裁き、処罰する必要性が、他の何よりもあることを主張します。

第二点は、同志岡本公三に対しても、レバノン政府が、彼の亡命を承認したという厳肅な事柄についてです。私たちは先ず、亡命を認めたレバノン政府に感謝し、その実現のために、多くの支援を行つてくれたレバノンとアラブの人々、そして

数人の荷物を整理している「外務省」がいたが、もう本隊はいなかつた。

【3】——ナリタの地上に降りていくステップや、ビル階段にも、誰一人いない。そしてエプロンには、数台の車、小型バス、そして、制服警官の列があるだけであつた。

つまり夕闇がすでに包んだナリタの飛行場脇は、夜の闇にとざされて何も見えなかつた。私が最後に日本を出発した27年前には、空港建設反対闘争のために開港できずにいたナリタへ、しかも、暗闇だけの空間に連行され、私はもどつて来た。どこへもどつて来たか、全く分らない仕方で……着いた。これが私の帰国だつた。側の初老の刑事や制服の列に対してといふより、この闇の中にひそんで、私たちを送還させた、『誘拐団』の頭目——警察庁に対する怒りが、路面を歩く一歩毎に、いやましにつのつていつた。

6
エピローグ——
先ず『誘拐団』との鬭争開始！
【1】——3月18日、私は、警視庁、総務

捜査刑事の取調べは、極めて紳士的で、黙秘します。」「調書は拒否します。」といふ私の主張をくり返し聞いて、私がすんで応じた人定調書（名前を認める調書）以外は、一切無理強いしようとはしなかつた。極めて「民主的」な姿勢なのだ。

しかし、そんなことで、『誘拐団』による強制送還風の犯罪行為が帳消しに出来る訳ではない。いや、彼らが、日々の現場警察活動で「民主警察」を演じれば演じるほど、その後方から、国家権力を力に着て、あたかも正義の宝刀でも振りまわしているようなツモリで、制度的な腐敗というシステム犯罪を日々行つている奴等に対する怒りは心頭に達しつづける。

私は、この犯罪者たちに対する闘いを、

部留置課の管轄する留置場に入れられた。そして、早速19日の午前、午後、ある日は夜も加えて、取調べ室における尋問が開始された。もちろん、弁護士以外の面接は禁止の「接見禁止」処分の身分で、それは、10日間。更に延長され、20日間、一杯で、計23日。

捜査刑事の取調べは、極めて紳士的で、

黙秘します。」「調書は拒否します。」と

●

2000年・ペイロート・春 ● 144

日本の人々に感謝します。

また、このレバノン政府の決定は、アラブの民族的大義と共に闘つてきた岡本および日本赤軍の闘いに対する意志表示として受けとめ、日本赤軍は、同じように、今後とも闘いを続けていくことを、ここに確認します。

第三点は、私自身についてです。私は、この27年間、ほとんどスレギヌとしか言えないようなシャクシヤイン像の損壊事件で国際手配され、身動きが取れませんでした。

しかも、今回帰国し、問い合わせたところ、検察庁も警視庁も、いや事件の起つた北海道警察も、私を国際手配した覚えはない、という。そんな微罪では国際手配は出来ないという。では、誰が理でした。

1969年以降、地下に潜行していた共産同赤軍派メンバー・梅内恒夫は1972年4月、「共産同赤軍派より日帝打倒を志すすべての人々へ」という長文のアピールを「映画批評」「証拠」などへ送付する。この中で梅内は、森恒夫らによって党内路線をはばまれたこと、さらに71年3月に森ら赤軍派指導部と分岐したことを明らかにした上で、前衛主義、非合法活動の原則の逸脱、破産した路線への固執が連合赤軍事件をおこしたこと、さらに太田竜、竹中労、平岡正明らが当時うちだしていた汎アジア窮民革命論、とりわけ太田竜の戦略への支持を表明して、注目を集めめた。その後、梅内の行方は杳として知れないが、梅内論文は赤軍派との後の東アジア反日武装戦線の爆弾闘争をつ

なぐものとして不吉な光を放つてゐる。

第三世界の窮民を、そしていまなお原始的生活を送つている人々を、一切の支配から解放するための闘い以外の、「党」の都合による「党のための闘い」を我々は拒否する。

前衛の役割は、ひとつには我々の味方が闘う時、武装の問題を解決し、手に入れた武器が使い方によつて最大限の効果をあげることを、実践によつて示すことである。

前衛の役割は、もうひとつある。日帝の出方を完全に見通して、打倒日帝のための長期的かつ世界的な布石を打つこと、超陰謀をはかりめぐらすことである。(略)

我々は、ハイジャックを次のよう

梅内恒夫

兵士たちのメモワール

由・根拠もなく国際手配していたのか? インターポール(国際刑事警察機構)は、勝手に手配は出来ない。各国の警察の要請があつてはじめて出来る。だから、日本の警察、つまり、警察庁が、理由・根拠もなく、私を勝手に犯罪者として決めつけ、国際手配していた、という犯罪行為が浮び上つて来たのです。

私はこの犯罪行為を許せない。必ず、第一点と共に、事実実体を究明して裁きの場に引きずり出して行くべきことを、主張します。

第四点は、本件についてです(=偽造有印私文書行使)。

私は、全く身に覚えのないことと、裁判によつています。この問題についても、誠実に素直にとり組んで行きます。

世界革命戦争の布石のために、世界に飛び散ること、このことはまったく正しい。しかし次の三点において間違つていた。

第一に、太田竜の指摘したように、朝鮮民主主義人民共和国ではなく、大韓民国に行くべきであつたこと。

第二に、「党」の代表ではなく、世界革命浪人として行くべきであつたこと。日本の労働者を代表しない「党」なんか、「労働者国家」の「党」も、アジアの窮民の党も相手にするはずがない。そして日本労働者階級を代表する革命の「党」はありえないのだ。韓国に行く時は、共産主義者として行くことも避けるべきだ。韓國人民を日帝から解放する「志士」として行くべきだ。

第三に、ハイジャックではなく、密航によつて行くべきだつたといふことである。獄中の同志の奪還のためではなかつたら、世界革命戦争のための布石は、秘密裡に行なわれるべきである。金日成がいくら革命的であったとしても、ひとりの日本の極左学生に対する支

(絵も筆者、「文藝」二〇〇〇年秋号初出)

さて、最後になりましたが、私は日本の現実から見れば、いわゆる30年前のミイラでしかありません。しかし外にいた間に種々、ためこんだ考えもあります。日本の皆さんから、いろいろ学びながら、それをクロスさせ、今後の私の闘いをするために、たまごんでもあります。よろしく。」

この内容が、私の今の、基本的な立場であり、闘争主題である。これまで多くの人々の支援・救援のおかげで、ここまでやつてこられた。今後は、それらの人々に応えていくためにも、徐々にではあつても、この地点からオングルにダッコを脱して、恩返ししていきたいと決意している。

(前記論文より)